

# 2015年度 政策提言ツアー 実施報告書

実施日:2016年2月26日

訪問・議論先:財務省(主計局)、厚生労働省、農林水産省、国土交通省

参加者:赤井ゼミ<sup>1</sup>学生 21名および大学院生 1名、引率教員 3名(赤井・倉本・足立)

## 内容

1. 政策提言ツアー企画の経緯.....	2
2. スケジュール.....	2
3. 写真.....	3
財務省訪問と意見交換.....	3
厚生労働省との意見交換会(大阪大学東京オフィスにて).....	5
農林水産省訪問と意見交換.....	6
国土交通省訪問と意見交換.....	7
3. 学生コメント.....	8
.....	8
4. 政策提言ツアー実施の効果:引率教員のコメント.....	15



<sup>1</sup> 連絡先: 赤井伸郎 (大阪大学国際公共政策研究科教授) akai@osipp.osaka-u.ac.jp

## 1. 政策提言ツアー企画の経緯

大阪大学法学部国際公共政策学科赤井ゼミ所属の学生が 2015 年度に執筆した論文（題目「環境不動産普及に向けて～自治体版 CASBEE を用いた実証分析～」）が、ISFJ（日本政策学生会議）において、政策提言賞を受賞した。（本論文は、同時に最優秀賞も受賞し、全部門を制覇した。）この賞を受賞したゼミは、論文において提言した政策に関して、実際に、その政策を所管する省庁に訪問し、提言を行う慣例にある。受賞した論文は、環境不動産の普及に関わる論文であり、この政策に関わる官庁として、国土交通省を訪問することにした。また、その省庁の予算査定を行う財務省も訪問することにした。さらに、このテーマのほかに、介護保険、耕作放棄地に関する論文を執筆したこともあり、財務省において、これらのテーマに関わる事業の査定を行う担当者と議論することにし、加えて、厚生労働省、農林水産省にも訪問することにした。本ツアーに御協力いただいた省庁の皆様には、学生に貴重な体験の機会を与えていただいたことに、深く感謝したい。

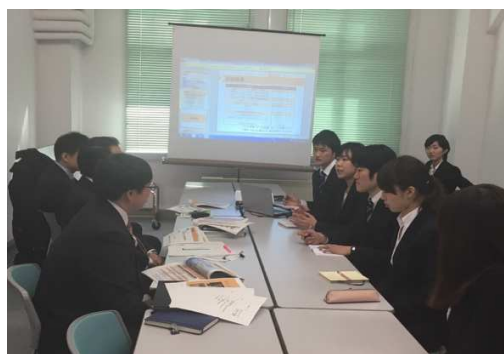
## 2. スケジュール

### 2月26日(金)

集合	移動	“各班発表”	移動	昼食	移動	到着
霞が関 阪大オフィス	-----	財務省 主計局	-----	財務省食堂	-----	霞が関 阪大オフィス
9:15	3分	9:45-12:00		12:00-12:40		12:45
				(12:40 には財務省を出る)		
“セッション①介護予防”	移動	“セッション②耕作放棄地”	移動	“セッション③環境不動産”		
霞が関 阪大オフィス	-----	農林水産省 正面玄関 集合	-----	中央合同庁舎 3号館 3階 320		
13:00-14:00	5分	14:15 14:30-15:30	5分	16:00-17:00		
(厚生労働省老健局老人保健課)		(農林水産省農業振興局地域振興課)		(国土交通省住宅局および土地・建設産業局)		
移動	反省会など → 解散					
-----	霞が関 阪大オフィス					
	17:30	18:00				

### 3. 写真

#### 財務省訪問と意見交換



財務省各省庁担当者



**厚生労働省との意見交換会(大阪大学東京オフィスにて)**



## 農林水産省訪問と意見交換



## 国土交通省訪問と意見交換



### 3. 学生コメント

学生番号	今回のツアーに参加しての満足度 【5…大満足、4…「満足」、3…「普通」、2「やや不満足」、1「不満足」】 今回の各省庁への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと	
1	4	<p>2年生以来の参加となり、非常にエキサイティングでした。このツアーの特徴は、それぞれの事業官庁だけでなく、財務省の方とも議論できることだと思います。赤井ゼミでは「ほんとにその政策必要ですか？」というところから見ていくので、同じような視点を持っている財務省の皆さんと議論できることはすごく勉強になります。そしてそのような姿勢が各省庁にももっと根付いたほうがいいとも思いました（昔に比べるとレビューなどの実施により意識は高まっているとは思いますが）。厚労省にしても農水省にしても制度、事業が大変複雑であり、そしてそれらが毎年のように変更になるため、地方自治体で実際に働いている方がその対応に相当のマンパワーが消費されているように感じます。一度、それらを修正することを中断し現行の制度を走らせたままで、整理・統合に集中する期間があっても良いのではないかと考えます。</p>
2	5	<p>各省庁とその予算を担当する財務省の双方の担当者に話を聞いたのはとても良かったと思う。各省庁の官僚の方が普段から政策の立案に携わる中で直面している課題をくわしく聞けただけでなく、財務省の担当者からも予算配分を念頭においたコメントを頂く中で、その政策が日本においてどれくらい大きな問題に対するものなのか、国の政策全体の中でその政策の優先度はどれくらいなのかなど、広い視野でそれぞれの政策を捉えなおすこともできたからだ。問題の重大性や政策の重要性にも目を向けることは、論文のテーマ選びにおいて非常に大切な視点であることを再認識した。また、霞が関一帯は歴史のある建物や大きなビルが立ち並び、その中で多くの官僚の方々が働かれていて、「ここが日本を動かす中心なのだ」と改めて圧倒された。</p>
3	5	<p>まず初めに、今回もいくつかの省庁に訪れることができ、とても良い経験になった。また、どの省庁の方も丁寧に対応してくださり、今年度もスムーズに進行することができた。農水省の発表において、私たちも、約半年の時間をかけて政策を練り上げるが、やはり現場で働く省庁の方々は全ての施策の目的・実行・廃止に関する経緯や意味を十分に理解していることから、時に厳しいフィードバックをくださり、とても勉強になった。このようなフィードバックは、赤井ゼミの来年度の論文執筆への励みにもなるのではと思った。このような学生と省庁の距離が縮まる機会がこれからも続いてほしいと思う。</p>
4	5	<p>政策議論においても、エビデンスベースドが求められており、どの省庁でも定量的な分析を行った点を研究の成果として高く評価してもらえるということを感じた。今年で3回目の参加だったが、特に財務省はそうした数字での議論を特に重視している印象を受けた。ただ、農林水産省での議論を通して、定量的な結果だけでなく、政策実務者や利害関係者の意見を鑑み、定性的にも説得的なストーリーを紡ぐ重要性も学んだ。政策を学ぶ学生にとって、研究成果に対して、直接に政策実務者の意見を伺えることは非常に嬉しいことであり、大きなやりがいを感じることも、今後の研究に向けて非常に有益な示唆を得られる機会でもある。今回も、一介の学生の発表に対し、真摯に対応してくださり、非常に良い提言ツアーになった。</p>
5	4	<p>今回の提言ツアーでは、2, 3回生がこれまでのヒアリングの経験を活かして実のある議論ができており、例年に比べても充実していたと感じました。その点で、ある意味私たち学生が、自治体と中央省庁の架け橋のようになっていた気がします。さらに言えば、難しいテーマにもよりますがもっと生活している学生（国民）としての視点も取り入れながら、議論ができるとよくなるように思いました。また、この提言ツアーで改めてわかった実状なども多かったと感じたので、これを踏まえて論文を見直す機会を設けるのもよいのではないかと思います。農水省の方々は、学生でも遠慮なく突っ込んでいたのが印象的でした。</p>
6	5	<p>省庁の方々が地方自治体の方の意見（ゼミ生のヒアリング結果）に対して興味を示されているように感じたのが印象的でした。ヒアリングへの回答で学生相手だからこそ答えてくれる各自治体の実情や本音を聞くのは、官庁の方にとっても新鮮なのかなと感じました。またそこから、地方自治体ではなく国レベルで政策や制度を整えることの難しさを感じました。（様々な地域の実情や地域差を考慮しなければならないため）。さらにツアーの1日を通じて、分析結果を踏まえて提言を考える際には、現場視点を欠くことがないよう極力意識する必要があると改めて感じましたし、そのために有効なのは自治体や官公庁、関係団体へのヒアリングであろうと再認識しました。</p>
7	5	<p>〈厚生労働省〉まずは、ヒアリング調査にお答えいただいた方に完成した論文を発表し、ご意見を頂けたことが非常に嬉しかった。基本チェックリストというツールそのものについてや、かかりつけ医と連携するにあたっての負の要素、連携の程度についてなど、論文中では深く掘り下げて考察することができていない部分で、かつ、実際に政策の実現を考えた時には熟慮が必要な点についての確にご指摘いただき、現場で日々政策に向き合っている方の鋭さをひしひしと感じた。〈財務省〉介護を必要とする可能性のある高齢者だけでなく、他の世代のこともバランスよく視野に入れながら政策を考える必要があるということも学んだ。〈農林水産省〉論文に出てくる制度それぞれの担当者の方が対応してくださっていて感動した。〈国土交通省〉様々なアプローチによって地球環境の改善に向けた努力がなされていることが分かった。</p>



8	5	<p>提言ツアーでは、我々学生と各省庁の方の視点の違いにまず驚いた。一般的な社会問題の解決を考え、いかに有効に解決するかを考える学生と、財務省はいかに優先順位をつけ効率的にそれを行うかを考え、各省庁は現場（農業従事者）にいかに動いてもらうかを自分達以上に熟慮されているのだらうと感じた。これは他の省庁（厚労なら高齢者、国交なら究極的には不動産購入者）でも言えることだと思う。農水省での発表では、各分野のスペシャリストの方にご講評頂いたが、そのなかで共通していたのは、自分達が考えきれなかった現場という視点の重要性を痛感した。ただ、1つ気になった点として、各部署、各対象、地域により個々に思い思いの政策を乱発している印象が見受けられる。それが農水省の政策を分かりにくく、複雑にしているとも思った。政治など、それぞれの政策を統括する力が必要と感じる。</p>
9	5	<p>財務省では主に提言施策の費用対効果や有効性について、国交省では国が目指している方向や最近の施策を踏まえたうえでの提言施策の有効性についてお話を頂いた。これは、テータやHPで公開されていること、地方自治体のヒアリングではなかなか得られなかった点であるのでとても良い機会となった。特に印象に残っている質問は、「その施策は地方自治体にとってどういうメリットがあるか」、「どのように自治体に施策を進めるインセンティブ付与をしていくか」というものだ。論文大会までの質疑応答ではあまり出てこなかった論点であるが、本ツアーでは財務省と国交省の両方で聞かれた点である。国が目指したい方向へ自治体を動かしていくためには、その自治体にどのようなメリットがあり、どのようにインセンティブ付けをしていくのか、という点を考えることは、国の役所として重要なことなのだと感じた。</p>
10	5	<p>今回の提言ツアーでは、大阪府のときと同様に、実務に関わる方からフィードバックを得ることができ、自分たちがやってきた研究をより深めることができたと感じます。今回、厚労省、農水省、国交省に伺いましたが、特に農水省は集落営農、認定農業者など各関係のある部署全てから担当者の方が来て、厚遇してもらい、非常にありがたかったです。研究においてはテータの制約があり、どうしても調べることができなかった部分が多くありましたが、実際の現場ではそうした調べることができなかった部分が重要になってくるのだと感じました。この提言ツアーがあることでいい論文を官僚の方々にお見せしたいという執筆活動中のモチベーションにもなるので、今後是非続けてほしいと思います。</p>
11	5	<p>今回で2回目の提言ツアーとなったが、実際に大会に提出した論文について実務にあたる方々と議論する機会をいただくのは大変貴重な機会であると再認識した。というのも、やはり大会では学術的な視点から論文の出来を審査されるが、ツアーでは実務ベースでの議論になる。その様な議論の中で、論文を書く中で思いつかなかった視点や問題点について触れることが出来るのは、ただ論文を発表するだけでは決して得ることのできない経験だと思ふからだ。今回参加して感じたのは、なるべく現実を見据えた上で政策を考案しようと努力しているものの、資料や数字からは見えてこないものも未だ多くあると痛感した。また、今年は特に農林水産省での議論が活発であったが、省庁の方々真剣に論文内容に向き合ってください、ということはISFJに論文を提出する大きなモチベーションになると改めて感じた。</p>
12	5	<p>自分の班の発表の際は、論文において考察を行った内容に関わるほぼすべての政策の関係者が聞きに来てくださり、率直なコメントをいただき、非常に有意義であった。また、発表終了後にも時間をとって話を聞いてくださり、また農林水産省の政策決定の考え方などのアドバイスなどもくださり、学んだことがとても多かったように思う。提言に関しては、大阪府に伺った際と同じように、時間の制約上、具体的なレベルまでなかなか落とし込めなかった点について反省したい。たくさん制約が存在する中で、実際に政策を考え実行することの難しさを改めて感じた。大阪府でいただいたコメントと今回いただいたコメントを見比べると、省庁と府の政府間関係の見方の違いも感じられる。このような乖離が行政的なノスを生んでいる一因でもあるだろう。農業政策は高度に土地に依存しており、個別的な事情にあった政策が必要であるとともに、外国農業の脅威による生存競争の兼ね合いから国全体としての政策も不可欠であることから、政府間で効率的に連携して整合性のとれた政策を検討していく必要がある。</p>
13	5	<p>中央省庁で私たちの研究を発表できる機会には本当に貴重であり、このような場を設けて下さった先生と全ての関係者の方に感謝します。財務省の方たちには財政的な面で、農水省の方たちには実際の施策との整合性や実現可能性などの観点から様々な指摘を受けました。時間の関係上、私たちの班では、論文執筆の際大阪や分析対象の自治体を中心に聞き取り調査を行い、その結果農水省への聞き取り調査が十分にできなかったことが原因だとは思いますが、現場の声を反映しきれていないという指摘を受けることが多かったです。私たちが一部の政策を分析対象にして出した結果と、国・自治体の政策成果や実際の地域での政策効果には違う部分があり、そのような現場の声を反映させることも、論文を書くにあたって重要なことなのだと痛感した瞬間でした。省庁の職員の方々は何んともなく固いイメージがありましたが、学生の意見もきちんと考慮した上で、様々な指摘を頂き、必要な資料を揃えて対応してくださりうれしかったです。今回は先輩方が回答することが主でしたが、来年以降自分たちも対等に討論できるくらいのレベルになれるよう努力したいという気持ちが、終わった今では強いです。</p>
14	5	<p>農水省では、それぞれの政策の専門家の方に来ていただき、政策の面からのお話を聞くことができた。自分の勉強不足を痛感しながらも、集落営農や認定農業者といった担い手に関して詳細な話を聞いた。特に、農業に関わる問題解決のために、農業従事者に寄り添った政策を行っているということが伝わった。提言については、すでに実施しているものもあるなど、厳しい意見をいただいた。来年自分たちが主体となって執筆する際には、ヒアリング等を行い、現場からの声をしっかり聴く必要があると感じた。</p>

15	4	<p>今回の提言ツアーでは、財務省及び関係省への提言ツアーということで、これまでゼミ生全員で頑張ってきた成果を当事者の皆さんにみていただけた。二年生のわたしにとっては初めてのことで、大変貴重な経験になったと思う。特に厚労省に対する発表では、自分たちの提言で突っ込みきれなかったボランティアの具体的な内容や、どのような姿勢で厚労省の方々が政策に取り組んでいるのかについて教えてくださったのは非常にためになった。論文を書く際に、研究者のみなさんの目線と、今回コメントいただいた実務者の皆さんの視点のちがいがうまく対応しながら研究を進めていく必要性を強く感じた。</p>
16	5	<p>まずとてもミーハーな感想だが、各省庁を実際に訪問し、第一線で活躍する官僚の方々にお会いできてとても感動した。現場で働く方から自分たちの発表や政策提言に関して、現場のリアルな目線から評価をしてくださるのがとても嬉しかった。厚生労働省はわざわざ阪大のオフィスにまで足を運び、丁寧にコメントをもらっていらしたのが印象的で、全体的で柔らかな雰囲気を感じた。農林水産省は農地班の発表に対応できるようその道のプロフェッショナルを集めて総力戦体制で臨んでくださり、農地班を全力で受け止めようとした姿勢に感銘を受けた。また、様々な資料を用意してあり個人的には今回訪問した省の中で一番好きになった。国土交通省はこちらが遅刻し失礼なことをしたにもかかわらず、穏やかに受け入れて発表に対して現場からのコメントを丁寧にくださったことが嬉しかった。自分たちの班がやってきたことを現場の人に評価される嬉しさを痛感した。今回の提言ツアーで、学生では絶対に行えない生まれて初めてこの国を動かしている官僚の方々にお会いし意見をいただくという本当に貴重すぎる経験をさせていただき赤井先生にとっても感謝しています。ありがとうございます。来年の提言ツアーは自分たちが主体的になって作り上げた論文を持って臨めるように精進したいです。</p>
17	4	<p>今回は、最後まで回ることができずに早退させていただいたので、心残りもあり、「4」という評価をしました。しかし、まさに日本の中心である霞が関に足を踏み入れるという貴重な経験ができて、自分が同行させていただいた時間に関しては、満足度は高いです。はじめに行った財務省に関しては、若干道に迷ったりはしましたが、担当の方の対応は丁寧で、ためになる資料もいただけて、すごくありがたかったです。発表・議論の際には、今後を見据えた視点から、定量的には測れない部分に関する指摘などをいただき、政策を評価する難しさも知りました。農林水産省では、資料を封筒にまとめるほどたくさん用意していただけたりと、政策担当者の方にもれなくお越しいただいたり、非常に良い待遇をしていただけて感動しました。議論の際にも、勉強不足な面ばかりでしたが、一つひとつの点について細かく指摘をいただき、参考になりました。十分に来年に活かしていきたいと思います。</p>
18	5	<p>実際に省庁に行き、自分たちが考えた論文、そして政策を発表し、コメントをいただく機会は大変貴重であり、学生の考えた政策が国に届く機会があるということは今後の自分たちの論文執筆のモチベーションにもつながると考えたため、満足度評価を5にさせていただきました。発表の前、財務省はカタイ省庁というイメージがありましたが、実際に発表すると予算編成を担当しているだけあって厳しい指摘が多めだった印象があります。農林水産省は、農地班の発表に熱心に耳を傾け、他の省庁に比べて一番コメントも多く、学生に対して熱心に接してくれた印象があります。環境不動産の発表では、前々から指摘が多かった容積率緩和について指摘をいただき、論文の課題が一層浮彫りになったと感じました。</p>
19	5	<p>自分は今までテータ分析で出た結果の数字を見て政策提言の内容を考えるばかりであったが、省庁の方々の話を聞くと実務レベルの政策提言はそれだけではうまくいかないということを思い知らされた。今後自分が論文を書くにあたってはヒアリングもしっかりと行い、地に足のついた提言を行っていきたいと思う。懇親会では貴重なお話をたくさん伺った。自分は中央省庁につとめることも選択肢の一つであると考えているので、とてもいい経験になった。内閣府の方々はいろいろな省庁からきているひとが多かったので各省庁の雰囲気など興味深い話を聞くことができた。</p>
20	5	<p>本ツアーの意義は、全国の行政機関のトップに立ち、指揮を行う霞が関官僚の方々から論文の欠点や優れている点に関する意見を頂ける点にあると感じています。私の班の発表においては、介護政策の質の部分に更に焦点を当てるべきだということなど、きめ細やかな意見をいただくことができました。また、各省庁についてはソフト・ハード面ともに各々の特徴を感じることが出来、興味深いものでした。特に、私が発表を行った財務省と厚生労働省においては丁寧に介護に関する問題を提示していただき、親切に的確に対応していただきました。また、ハード面においては財務省の庁舎は趣があり日本の財政を仕切る省庁であるということが感じられました。</p>
21	4	<p>全体的な感想としては、テータでみる政策と現場でみる政策には想像以上に差があったことに驚いたことが挙げられます。介護政策については、ボランティアポイント制度において対象年齢を引き下げることによる、比較的若年層の労働力の流出や、それに関連して健康な高齢者に対しどのようにインセンティブを与えるのかなど、自分では気づけなかった点について教えていただき、省庁の現場の方々の、他の政策も見据えた視野を知ることができたと感じます。また、厚労省の方々だけでなく、担当省庁の方々が学生の政策提案に対して真剣に(時には厳しく)向き合ってください、省庁に対するイメージや、また政治に対する距離も近く感じるようになりました(といってもこのように省庁と方々と対面してお話しできる機会はそうないのですが)。</p>

学生番号	今後、実際の政策決定を行う担当者との意見交換の場として、どのようなものを希望しますか？
1	来年度も政策提言ツアーの実施が叶うのであれば、財務省の方と、事業官庁の方を双方ご同席のうえでプレゼンテーションを行うというのはいかがでしょうか。また違った議論ができそうな気がします。
2	省庁の官僚との意見交換もとても勉強になるが、地方政府の官僚との議論の場がさらに増えればより良い経験ができるのではないかと思います。昨年で言う婚活や今年で言う介護予防や農地については、大阪府だけでなく、人口や財政の規模の異なる地方の政府にも話を聞いてこそ、将来的な政策のあり方をより深く考えることができるのではないかと感じる。
3	これまで、学生が発表し、それに対して省庁の方々から意見を頂くに留まっていたが、提言に関する更なるステークホルダー（農業班テーマであれば認定農業者等）にも議論に加わって頂ければ、学生・省庁の双方にとって更なる意見集約にもなり面白いのではと思う。
4	今回のように、小さな会議室を準備してもらい、政策の担当者が議論に参加して頂ける形が、発表後の議論もしやすく、政策実行の難しさや今の取り組みを知れるため、良いと思います。
5	他の班のゼミ生ももっと意欲的に参加できるようになればいいと思いました。また、自治体と省庁の方と学生3者合同で意見交換できたらおもしろいと思います。
6	レビューのレビューの後の懇親会のような形でお話できれば、自分たちが1年間扱ってきた問題や政策に関して、オフレコの部分のお話やより突っ込んだ話なども伺い、熱く議論することができるのではないかと思います。
7	論文執筆の初期段階で、政策の考え方や考慮すべき点など、現場目線でどのような政策立案が望まれているかを考えるような機会があればいいと感じた。
8	今回のツアーは満足であったので引き続き続けてほしい。
9	担当者にプレゼンテーションを聞いていただき、議論をするという現在の形がよいと思いますが、議論の時間がもう少し長ければと感じた。また、それに加え、現在特に力を入れて取り組んでいる関連する政策等について担当の方から説明を受けることができればさらに有意義になると感じた。（環境不動産班で言えば、チラシを頂いたグリーンリースについてなど。）
10	今後もこの政策提言ツアーは継続してほしいと思います。それに加えて、論文執筆活動中にも大阪に来る機会があれば、少し意見交換することで、研究の大きな助けになると思います。

11	今までのように財務省・担当省庁の両方と議論する形がよいと思う。ただ、担当省庁で特に議論が活発になるので、もう少しそちらの質疑応答に時間を割り当ててもよいのではないかと感じた。
12	省庁レベルに関して、これだけのものを用意して頂けて満足している。今後も引き続き、こういった機会があれば非常に有意義であろうと思う。
13	ご多忙中、私たちの研究に対してご講評・ご指摘を頂けることは本当にありがとうございます。そのご指摘を今後の研究に生かすこともできると同時に、今後のモチベーションにもつながります。今回、私の班は農水省で発表させて頂きましたが、各施策の担当者の方に聞いて頂き、それと同時に厳しい指摘も受けました。時間的な制約もあり、今回指摘を聞くということがメインになってしまった印象を受けるので、実際に政策に携わっておられる方たちにその場で逆質問できるような時間もあれば、より中身ある議論の時間になるのではないかと思います。
14	今回のように、財務省で総論を、各省庁で各論について意見交換のような形がベストではないかと思う。
15	今回のような東京へのツアーは実際の職場に行けたという点で価値があったので、東京へのツアーは良かったと思う。農水省はたくさん関係者の方が来ていただけたが、そのような機会がほかの省でも設けていただけたらと思う。
16	今回もあったが懇親会のように政策決定を行う方々と近い距離でかつ政策のことから考え方やプライベートなことなどのお話をさせていただく機会がほしい。また少人数のグループで政策決定を行う方と今後の日本などについてディスカッションなどできる場があれば嬉しい。
17	前述したように、今回農林水産省に行った際には、論文で扱う分野の直の担当者の方々にたくさん来ていただけたので、これ以上ない形で意見交換を行えたのではないかと思います。しいて言うなら、担当者の方々みなさんから十分にお話を伺える時間の確保が難しかったです。
18	今は大阪府と、論文に関わる省庁で発表・議論の場があるが、論文を書く中でのヒアリング先にも発表することができたらおもしろいかもれない。
19	今回の場合、懇親会があったのは内閣府の方々だけであったので、他の省庁の方々ともお話をする機会があれば良いなと思った。
20	意見交換は、本年と同じような形で進めていけたら良いと思います。また、更なる議論の活発化としては、他大学など参加学生を増やすような取り組みを行うと良いかと考えました。
21	今年同様の形を引き続き希望します。他には、関連省庁それぞれの実際に行われているもしくは今後実施されることが決まったような事業について議論したりするのも面白そうかなと思います。あとは省庁またがったの意見交換など(実現性は低いですが)です。

学生番号	財務省食堂のランチについて。(阪大のいろいろな学食と比べて)。
1	定食の種類が多く、ボリュームもありました。値段は学食と比べて少し高いが日々の生活費の違いを考えると十分安い金額だと思われる。栄養バランスが整っていて、とても美味しかったです。
2	定食を食べたが、値段に対して量・内容ともに阪大の学食よりも充実していた。特に内容については、おかずの種類が多いだけでなく、栄養バランスも気遣われていてとても満足した。
3	ハンバーグ定食を頂きました。阪大の定食に比べて、ボリュームも栄養も満点でした。メニューも豊富で、飽きがなさそうでいいなと思いました。
4	味や値段以上に、多くの人が並んでいるにも関わらず、待つ列が非常にスムーズに進むことに感心した。また、日本の財政を掌るプレーンたちが一堂に集うと考えると、当たり前ではあるが、衛生管理の重要性を改めて考えた。
5	財務省のランチは、日替わり定食は品数が少なかったと思いました。うどんを頼んだのですが、つゆの色が濃く、この2日間で一番関東を感じました。
6	全体的に、値段は少しだけ高めに感じました。一方で、日替わりのメニューが充実していたり、より健康的なメニューが多いという点では、財務省の食堂の方が勝っているように感じました。
7	私は日替わり定食を食べましたが、価格はやはり学食の方が安いように感じました。しかし、カツ重のような少しリッチな品もあり、メニューに幅があること、利用者が非常に多く、みなさんお仕事の合間で食事をささっと済ませられるようにすごい速さで料理が提供されているところが学食よりも優れていると思いました。
8	食堂のご飯は、野菜が豊富なメニューであり、満足。セットメニュー形式は栄養バランスが片寄らなくてよいと感じた。阪大も積極的に導入すべきである。というのも、若い内から食育を染み込ませれば、将来の健康、ひいては疾病による社会保障支出の削減にも繋がるのではないかと感じた。また、セットメニューの配付では、先払いながら、セルフで配膳を待たず取っていく形式であった。ここに、職員の道德意識の高さと、食堂側からの信頼がつかえる。村上さんと話していたが、盗む人を防ぐための監視員などの無駄なコストを省くためには、一人一人のモラルを高めていく必要があるのではないかと感じた。阪大生が道徳的になれば、パートのおぼちゃんの人件費も下げられ、浮いたお金で組合員に還元することも可能ではないか。
9	メニューの数を絞ることで、手際よく人数をさばけるようになっており、とてもスムーズでよいシステムだと感じた。価格はやはり学食のほうには敵わないと感じた。
10	学食と比べて、少し高い気はしますが、味は学食より美味しかったです。食堂のご飯を食べて、職員の方にはさらに頑張ってくださいと思います。

11	阪大にも定食系でスピーティな学食があればいいのと感じた。IC導入を謳う割には食堂にはICが導入されないのだなと思った。
12	職員が同じ時間に一齐に食事に入るため、非常に混雑していたが、食事の内容はいたってシンプルで、おいしかった。大学の学食は学生向けのため、単純比較はできないが、コストパフォーマンスは変わらないだろうと思う。
13	多忙なスケジュールを過ごす職員の方たちが省庁ごとにたくさんおられ、また限られた休憩時間を過ごすためには、食堂の回転を速くする必要があると思います。私の予想以上に食堂の回転が速くて、食券売り場でもメニューを吟味する余裕もありませんでした。量も職員さんにとってはいいと思いますし味そのものもよかったです。阪大の学食とそんなに大差ないのではないかと思います。メニュー構成はわりと凝っていたと思います。
14	これぞ大衆食堂という感じで、阪大で言うところの館下に似た雰囲気だった。ごはん自体は普通だったが、日本を動かす天下の財務官僚のみなさんが食べるものなのだからもう少しよいものをもと思った。
15	値段もそこそこでおいしくいただけただけで満足でした。食堂も意外に広いと感じましたが、キャパ的にはもうちょっと必要なのかなと思いました。定食のシステムは回転が速くていいと某ゼミ幹がおっしゃってましたが私もそう思ったのでぜひ阪大にも導入してほしいです。
16	阪大の学食と異なり多様性が少なかった。量が多く女性向けではなく、男性を満足させるためのランチだと感じた。ただし、料理が短時間で提供され、食堂のおばちゃんがひとりひとりに優しく声をかけてくれたのはとても好感が持て阪大でも実践して欲しいと感じた
17	いつも館下食堂で食べるうどんと比較するために、財務省の食堂ではうどんを食べました。関西と関東の出汁の違いも実感しましたし、阪大よりは具材が多く、どちらかというと私は阪大のうどんの方が食べられていることもあって好きでした。
18	洋食のジャンルはごはんの上におかずがのっているスタイルで、早く食べることができて、片づけるのも楽にする工夫なのかなと感じた。
19	いろんな種類があり、阪大の三階食堂よりは好ましいと思った。ただ、メニューによって量に差があるなと感じた。
20	財務省の食堂には、定食の形で売っており、阪大との違いを感じました。私が食べた和食定食はとてもヘルシーで阪大にあると女子などを中心に人気が出るのではないかと感じました。
21	和食を選んだのですが、第一印象は、値段の割に豪華でボリューム、品数も多くバランスがとれていると思いました。学食と比較すると味的には学食のほうが美味しいかなといったところですが、給食チックでした。

#### 4. 政策提言ツアー実施の効果：引率教員のコメント

##### 1)

このたび、霞ヶ関政策提言ツアーとして、省庁を訪問する機会を得たことは、学生にとって、日ごろ味わえない実体験をする貴重な機会となった。ゼミでは、さまざまな社会問題を取り上げ、その問題を解決するための政策のあり方を議論している。経済学的手法を駆使して、説得力のある解決策を示す努力をし、論文大会では、審査委員に評価してもらおう。ここでは、論文としての体裁や政策の妥当性を評価するものの、その評価者は必ずしもその分野の専門家ではない。専門家でない相手に対しても説得的な議論をする必要性がある。そのためには、現実が生じている問題の把握に加え、現在、その問題にどのように対処し、どのような問題が残されているのかを正確に知ることが重要である。

実際に、その問題解決のために政策の制度設計を行っている担当者と、政策課題について議論することは、これまで勉強してきた課題を正確に把握できていたのか、どのような視点が抜けていたのかを知るきっかけとなる。これは、単に、論文を改良できるだけでなく、今後の政策提言において注意すべき点も学ぶことができる。その意味において、将来につながる経験となったであろう。

また、いろいろな省庁を訪問したことで予算査定を行う財務省と、事業を実施する省庁との違いなど、政府の統治の仕組みも学ぶ良い機会となったようである。このツアーは、学生たちにとって、さらに深く社会を考える機会となり、大学を出た後、より一層、社会に貢献していくきっかけとなったと思われる。

##### 2)

政策提言を目的とする論文の価値は、分析スキルや分析対象、データ等の新規性だけでなく、「実際に政策として実現可能な提言となっているのか」という点からも決まる。今回の政策提言ツアーを通じ、学生たちに対して政策立案とその実行を担当されている方々から直接のご意見・ご助言を頂けたことは、学生にとって更なる学習の意欲につながったように思う。特に、現在の政策がどのようにどこまで進められており、今後どのように進めようとされているのかという、担当されている方ならではの話を伺えたこと、そしてそのお話の流れの中で学生たちの政策提言がどのように位置づけられ、実現性を持たせるためにどのような視点が必要になるのかを教えていただいたことが印象的であった。お忙しい中にもかかわらず学生のためにお時間を作ってくださいました全ての方々に感謝したい。